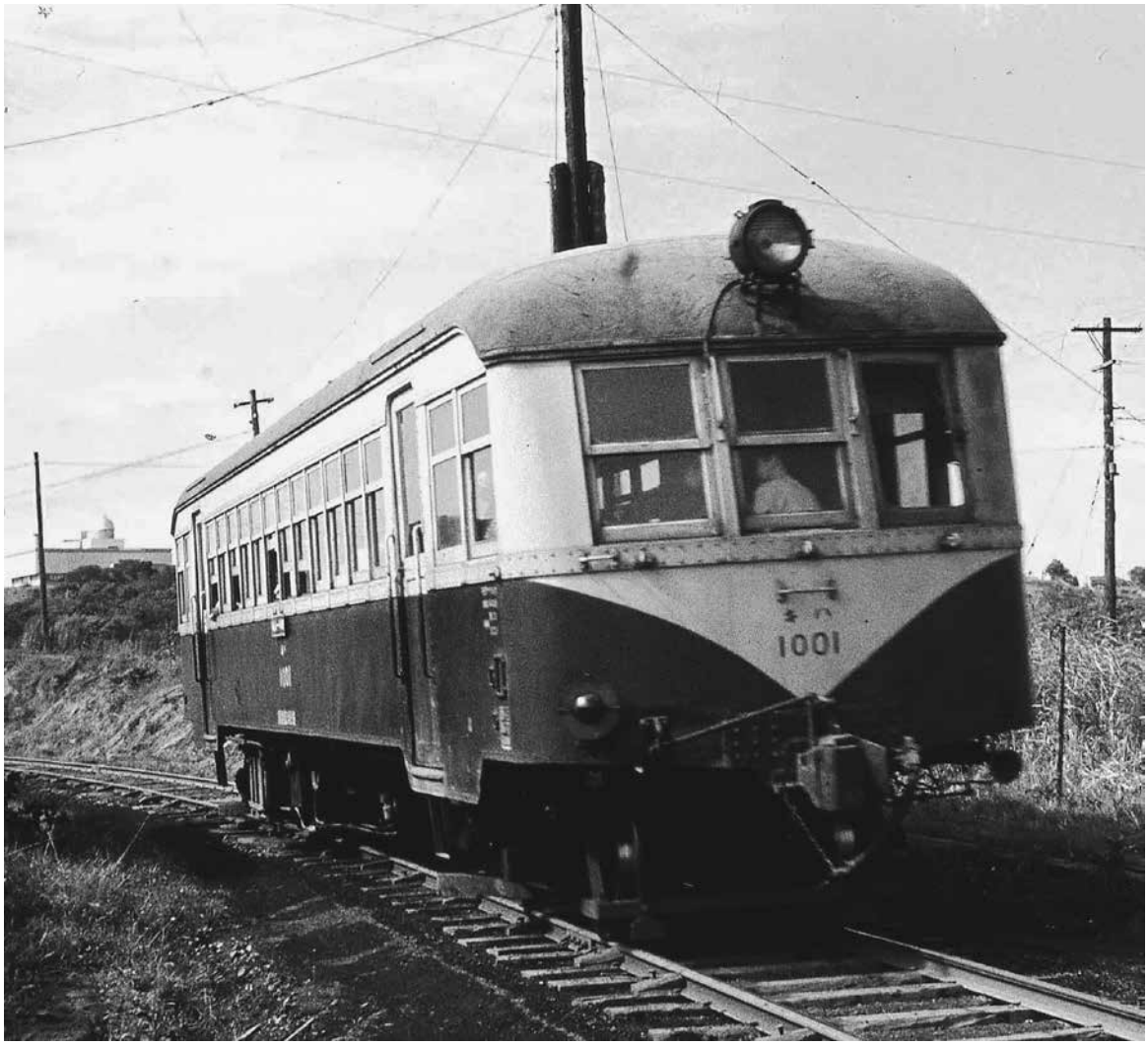
ISSN 2187－9591

Science Report of Kushiro City Museum

釧路市立博物館紀要

NO.413



2014.3

30周年の交点

北海道の太平洋に面した釧路と、九州の内陸部である田川。距離的に隔てるだけでなく、取り巻く環境や歴史的背景を異にする。一見して共通点が見出し難いが、両者が過去から石炭による人の結びつきがあったことは、あまり知られていない。

日本最大の産炭地としてその名を馳せた筑豊炭田。その中核都市である福岡県田川市に、ユネスコ世界記憶遺産「山本作兵衛コレクション」の所蔵館として知られる田川市石炭・歴史博物館が所在する。同館は筑豊最大の炭鉱だった三井田川鉱業所伊田竪坑跡地に建ち、敷地には当時の竪坑櫓と二本煙突が現在も残されている。伊田竪坑は、三井鉱山の技術者である佐伯芳馬・小林寛・田邊儀助が中心となって、明治43(1910)年に竣工。以降、筑豊炭田を牽引する主力坑となり、田川市発展の礎となった。

田川市だけの地域史を語る場合、ここでひとまずストーリーは終わる。しかしその続きが、時間と距離を超えた現在の釧路で紡がれた。

田川市石炭・歴史博物館と釧路市立博物館では、産炭地に所在する公立博物館の特色を活かし、石炭をキーワードとして様々な交流を行ってきた。学芸員同士、あるいは炭鉱OBとの相互交流から、共同企画展などの博物館事業まで、幅広く及んだ。

そして現在の石炭交流により、過去の新たな歴史が掘り起こされた。嬉しい副産物が生じたのである。

釧路コールマインの前身である太平洋炭砿(大正9年創業)釧路鉱業所初代所長は、先の伊田竪坑開削担当者の一人である田邊儀助であることを、太平洋炭砿OBの方から知らされた。当時の太平洋炭礦は三井系であり、同系の三井田川鉱業所から釧路へ赴任していたのである。田川の伊田竪坑開削以後の技術者の物語が、遠く離れた釧路で続いていたという新しい事実が、石炭交流によって判明した。

さらに、田川と釧路のつながりを示すもう一つの人びとの歴史が、山本作兵衛によって光を見る。

平成20(2008)年、田川市で開催した山本作兵衛展の交流企画として、釧路市立博物館でも展示を行った。その際、会場を訪れた一人が作兵衛さんの絵を見て、戦時中に行った筑豊の思い出を語った。

戦時中、釧路や樺太の炭鉱から九州の炭鉱へ労働力を移動させる「急速転換」。その一環として、釧路から田川の炭鉱へも多くの労働者が赴いている。あまり注目されていなかった史実だが、これを契機とした調査によって、具体的な内容が明らかとなった。

これまでの石炭史は、地域の中で語られて完結する場合が多かった。しかしながら全国へ視野を広げると、石炭の物語はより深みを増す。地域内のみに向けられたベクトルは、全国へと方向転換し、時を同じく迎えた田川市石炭・歴史博物館開館30周年、釧路市立博物館新館開館30周年の節目が交点となって、同じ進路へ舵を取ろうとしている。

田川市石炭・歴史博物館館長　安蘇　龍生

３月号目次

30周年の交点 ……安蘇　龍生　2
博物館新館30周年記念シンポジウム
～釧路市立博物館の歩みとこれから～
……西　幸隆・佐藤宥紹・境　智洋・新庄久志・山代淳一　3
ジオフェスティバルin Kushiro 講演会「道東とジオパーク」
……岡田　弘　7
チャランケチャシ……金山　潤・石川　朗　11
博物館ニュース……12

現在の石炭列車(太平洋石炭販売輸送)

〈表紙写真〉　企画展「釧路炭田の炭鉱と鉄道」より、釧路臨港鉄道の気動車「キハ1001」(撮影：宮内明朗氏)。旅客営業最終日の1963年９月30日撮影。以後、臨鉄は貨物輸送に専念、「シャットルトレーン方式」導入など輸送効率化を進める。背後には青少年科学館。(石川　孝織)

釧路市立博物館館報　№413　2014年3月号　2014年３月28日発行
発　行　釧路市立博物館　〒085－0822　釧路市春湖台1－7
☎0154－41－5809(博物館)・43－0739(埋蔵文化財調査センター)/ FAX 0154－42－6000
釧路市立博物館Web　http://www.city.kushiro.lg.jp/museum/
museum@city.kushiro.lg.jp(博物館)　maibun@city.kushiro.lg.jp(埋蔵文化財調査センター)
発行責任者　木村 俊宏　編　集　石川 孝織・土屋 慶丞・貞國 利夫　印　刷　㈱藤プリント　ISSN 2187－9591